

鰐口は、社殿・仏堂前の軒下につるされる礼拝用の楽器の一種で、参拝のとき、前につるしてある布で編んだ綱を振り動かして鳴らすものです。周縁の上方 2 カ所に半円形の吊手、下方に切込み（口）がついており、この口を鰐の口に見立て鰐口の名がついたといわれています。下中八幡神社にある鰐口は、直径 30cm、厚さ 8cm、重さ 7.4kg の青銅製で、県内でも最大級の大きさです。

この鰐口は、応永 33 年（1426）3 月吉日に長谷部徳永が奉納したものです。徳永氏の祖先は鎌倉から下島し、その子孫・徳永祐丕（すけひろ）は西之村地頭として徳丸ヶ野に住み、塩屋の取り締まりなどをしていました。そのおり、八幡神社の社殿が壊れていたので、新しく立て直し事業の繁栄と海上の安全を祈願して鰐口を奉納しました。

刻まれている銘文は中央上部に「奉（ほう）掛（かい）」、下方に「敬白」、外周に「正八幡宮之寶前 夫以金鐘有聲不扣豈鳴 時應永卅三丙午三月大吉日 願主長谷部徳永」、内周に「一心皈依渴仰三所和光證明求而無不合 願而無不成伏希旦那万福 祝」とあります。



鰐口